

---

# 転生して異世界廻り ~ GOD EATER 編 ~

黎白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生して異世界廻り〜GOD EATER 編〜

### 【Nコード】

N1174Z

### 【作者名】

黎白

### 【あらすじ】

D・C・？の世界で死んだ主人公がゴツドイターの世界に転生「本当はフェアリーテイルの世界も行ったんだけどな。」  
…………。蒼影のゴツドイターとして生活が始まる？

ちなみに前作のように、ハーレム、原作崩壊、チート、最強要素あります。チート、最強は多分ですけど。後は他の作品のキャラがでるかもしれません。更新はD・C・？より不定期になると思います。感想どうぞお願いします。

## 転生、アラガミとの戦い？（前書き）

こんな小説を読んでくれてありがとうございます。

転生、アラガミとの戦い？

「また、ここかよ。」

今俺が居るのは、転生の時に来た空間だった。

「ったく、お前はどれだけ恋人増やすんだよ。また全員ついて行くみたいだぞ？」

「夕紀か……。あいつらは？」

「多すぎるから連れてきてない。安心しろ、さっき行ったみたいに全員ついて行くみたいだから。」

まあ、今回は生きてた時に話したしな。

「なんか悪い。あ、次はGOD EATERで頼む。」

「本当に悪いと思ってんのかよ……。」

悪いとは思ってるが、それとこれとは別だからな。

「まあ、いい。で、誰を連れて行くんだ？」

「連れて行くのはそっちで決めてくれ。あの世界は危険多いからな。別に会おうと思っただら会える訳だし、危険多いからな。」

実際また転生するとは言え、目の前で死んだりしたら嫌だし、GOD EATERはFAIRYTAILより死の危険が多いからな。

荒神は手加減なんかしてくれないし。

「わかった。そうだ、この世界ではリンドウとサクヤは付き合ったりしないから。あと原作といろいろ変わってるから。」

あの二人付き合ったりしないんだな。でもどうして俺に言ったんだ？

「何で言ったんだ。」

「転生がリンドウとサクヤの幼馴染みだから、フラグ建てても気にしないようにな。」

リンドウ達と幼馴染みか……。てか今の失礼じゃないか？

「何でフラグ建ててるの前提だよ。」

「今の恋人数えてみる。原作キャラは基本的に全員、原作以外も建ててるだろうが。」

……………確かに。

「今回もそうとは「なるな。実は転生時にフラグ体質とか着けたから。」お前のせいだよ!？」

だからあんなにイベントが起こってたのかよ。

「って事でとつと行ってこい。だいたい原作四年前で十二才だからその頃には神機使いになると思うから。」

そこまで決定してるのかよ……。

まあ、いい。今回も原作は気にしないでいいみたいだから、とことん変えていくか。

「蒼影、早く来いよ。」

「わかってる。」

今何をしてるかって？まあ、転生して八年が経った訳で、原作キャラの雨宮リンドウ、橘サクヤと遊んでいる。ちなみにサクヤさんは十三歳リンドウは十八だ。

リンドウは俺の子守みたいな感じで遊んでるのが少しムカつく。

そういえば、リンドウが神機使いになるのっていつなんだ？原作とは違うんだから、どうでもいいんだけどな。

「どうしたの？」

「何でもないよ、サクヤさん、リンドウ。」

「いつも思っけど、何でサクヤはさん付けで俺は呼び捨てなんだよ。」

「アラガミいるかもしれないのに八歳を連れて行く奴にさんはいらないだろ。」

そう、俺はリンドウに連れられては花を見に行ってるんだけど、アラガミがいるかもしれないんだよ。てか本当に八歳連れて居住区でるか？

理由はサクヤさんの好きな花を取りに行くらしい。てかリンドウってこんなキャラだったか？

「いや、お前八歳にしてはおかしいだろ。」

「確かに蒼影って大人びているわよね。」

「ほらな、サクヤだってこう言ってるだろ。」

「だからってな……。まあ、いいや。こっちなのか？」

「ああ、この時代にしては綺麗な場所だから期待してる。」

こんな事になったのも、リンドウが規模は小さいが花畑を見つけたらしい。実際、アラガミがいるこの世界では珍しいからな。

「全くアラガミが来たらどうすんだよ。」

「その時は俺が囫「囫は無しな。三人で帰るんだから。」……わかつたよ。」

リンドウは原作でも自分を犠牲にしてたからな。無いとは思って、

俺がいる事でイレギュラーがあるかもしれないしな。

「蒼影の言うとおりよ。リンドウだけを置いていたりはないわ。」

「わかったよ。あ、ここだ。」

「わぁ……。本当に綺麗ね。」

「確かに、こんな世界では珍しいな。」

「だろ？だから蒼影とサクヤに早く見せたかったんだよ。いつこの景色が無くなるかわからないしな。」

リンドウが連れてきてくれた場所には、小さいながらも必死に生きている花があった。

やっぱりこんな時代だからこそ、綺麗に感じるな。前の二つの世界は、こんなに荒れた世界じゃないから、こんな小さい花畑じゃあまり感じる事も無かっただろうな。

「でもさ……。」

「あ？どうしたんだよ、蒼影。」

「いやさ、こんな場所にある花畑を知ってるって事はさ。」

「どうしたの、蒼影。何かあるの？」

サクヤさんも気が付いてないんだな。この年ならしょうがないか。



「少なくとも一回は一人でここに来たんだよね？」

そう。こんな場所知ってるのは一度来てるからで、少なくとも一人で居住区から出るっていう危険な事したんだよね。

何度かどこかに行ってるなとは思ってたけど、リンドウももう大人だし無視してたけど、これは流石になあ。

「いや、それは……。」

「蒼影の言うとおりね。リンドウあなたねえ。」

「アラガミに襲われなかったから良かったけど。」

「実際、襲われなかったけど、見た事は……。」

「はあ！？リンドウお前馬鹿かよ！？」

アラガミ見るって結構近い場所にいたって事だよな。本当に襲われなくて良かったよ。

リンドウを見ると、サクヤさんに説教されていた。十三歳に説教される十八歳って……。場所が場所だし、結構シールだよな。

リンドウの説教はサクヤさんに任せて、俺はこの綺麗な花畑でも眺めとくか。この世界に来て八年間、まともに綺麗な景色なんて見た事無かったからな。

初めは、ゲームが面白いなんて理由で選んだのに後悔したな。今で

はそんな事ないけど。

てかさ、リンドウ達は気付いてないけど、さっきからアラガミの声が聞こえてるんだよなあ。一応能力使うか？

「蒼影どうしたの？」

「何もないさ。サクヤさんはリンドウの説教続けててくれ。」

「蒼影！頼むから止めてくれ！！」

「ヤダね、居住区の外はアラガミがいるの知ってるのに、一人で出で行ったんだ。実際俺も混ざりたいんだよ。」

「うう……。」

転生してからずっと幼なじみだったんだしな。心配するのも当然だ。

てか、何考えてたんだっけ？

ああ、アラガミが来たらだ。一応技能作成《スキルメイク》でいろいろと作ってるからな。焰手品《フレアマジック》を初めとした五ファイ手品なら、規模は小さいから目立たないし、丁度いいな。

ちなみに、五大手品つてのは焰手品《フレアマジック》、凍手品《アイスマジック》、雷手品《エレキマジック》、嵐手品《サイクロンマジック》、岩手品《ロックマジック》の五つだ。

これは、規模が小さく威力の大きいその属性の魔法を使えるようになるってのだ。

これを作ったのは、D・C・？の世界でマジックショーをみた時だったな。

グルル

.....。

「なあ、サクヤ今何か聞こえなかったか？」

「聞こえたわね。」

「アラガミ.....。」

「「えっ!？」」

目の前には、小型のアラガミ、『オウガテイル』が二体いた。

「逃げるぞ、サクヤ、蒼影。」

「先に逃げてくれない？流石に三人だと逃げきれないからさ、助け呼んで来てくれない？」

オウガテイルとの距離からして、逃げたらその音で気付くだろう。なら一人が囷になるべきだ。

「ふざけるな！お前が三人でって言ったんだろ！囷なら俺が.....。」

「駄目だよ。それに餓鬼が助け呼ぶより、リンドウみたいな年上が呼んだ方が信じるだろ？」

「駄目よ、蒼影!!」

まあ、俺は今八歳な訳だしな。普通に考えたら、任せれないよね。

「リンドウ、頼むって。俺、リンドウに勝った事あるし、大丈夫だつての。」

「……………、絶対だな。絶対に死なないんだな。」

「ああ、信じる。」

「わかった。」

「リンドウ!?何言ってるの!?!」

「行くぞ、サクヤ。」

リンドウはサクヤさんを連れて行った。信じて貰えて良かったな。普通は信じないんだろうからな。

サクヤさんの為にも、わざわざ俺を信じてサクヤさんを連れて行ってくれたリンドウの為にも、生きて帰るか。

「さて、観客はいないが、マジックショーの始まりだ!!」

転生、アラガミとの戦い？（後書き）

って事でG O D E A T E R編です。

「大丈夫なのかよ。」

D・C・?でも言ったけど、不定期にはなる。しかも原作までは時間がかかるぞ。

「まあ、頑張れ。」

分かってる。こんな小説を読んでもくれる皆様ありがとうございます。

「感想やメッセージも待ってます。」

## アラガミとの初バトル

リンドウside

俺は、蒼影とサクヤを連れて前見つけた小さな花畑に行った。あまりこういう事に興味の無い俺でも、綺麗と思ったから二人なら喜ぶと思った。

思った通り、二人は喜んでくれた。まあ、蒼影の一言……俺が一人で居住区から出てったという事を、蒼影が気付いたせいで俺はサクヤに説教された訳だが。

でも、説教が終わった後はサクヤも蒼影もその花畑を見ていた。

それに説教は面倒だけど、俺を心配してくれてた訳だし、その事は結構嬉しかった。

ちなみに、蒼影は説教の間も花畑を見ていたんだけどな。まあ、それでも心配はしてくれたみたいだ。

で、その後何かの声が聞こえたかと思うと、蒼影が呟いた。

「アラガミ……。」

見るとアラガミが二体いた。幸い気付かれてたいみたいだから、二人に声をかけた。

「逃げるぞ、サクヤ、蒼影。」

「先に逃げてくれない？流石に三人だと逃げきれないからさ、助け呼んで来てくれない？」

俺が声をかけると、蒼影は俺に言ってきた。

「ふざけるな！お前が三人でつて言っただろ！囧なら俺が……。」

蒼影が言ったのは、囧を買って出たようなものだ。それなら、こんな所に連れてきた俺がやるべき。そう思ったが……。

「駄目だよ。それに餓鬼が助け呼ぶより、リンドウみたいな年上が呼んだ方が信じるだろ？」

「駄目よ、蒼影！！」

「リンドウ、頼むって。俺、リンドウに勝った事あるし、大丈夫だっての。」

「……………、絶対だな。絶対に死なないんだな。」

「ああ、信じる。」

「わかった。」

サクヤは止めようしていたが、蒼影の目は死ぬ気なんてまったくなく、何故か信じてみようと思った。

「リンドウ！？何言ってるの！？」

「行くぞ、サクヤ。」

だから、サクヤを連れて逃げ出した。少しでも早く助けを呼ぶために。

助けと言っても何をしたいのかは、わからなかったが。

「リンドウ！蒼影が！」

「蒼影は死なないっていったんだ。信じて助けを。」

一番年上の俺が年下に任せるのは嫌だったが、実際蒼影は俺に勝った事もあった。

だから、サクヤの声を無視して信じる事と助けの事だけを考えて行動した。

今、俺に出来る事を考えて……。

蒼影 side

「ありやりや。なんかザイゴートいんじゃない。」

確かオウガテイルの弱点は神だけど無いから他の属性しかないな。ザイゴートは神以外だから、焰手品《フレアマジック》、凍手品《アイスマジック》でいくか。

「凍手品！形成弓！」

凍手品を使用し、弓と矢を作り出す。体は八歳だから、遠距離で倒



すしかないからな。まあ、神機じゃなく倒れるかは分からないんだけど。

しかもオウガテイルはアラガミの原型であるにもかかわらず、近距離、遠距離、全方位への攻撃手段を持ち合わせているからな。たしか原作か漫画か忘れたが、ペイラーから「原型にして完成体」と評されてたような気がするな。

ザイゴートも面倒だな。

「っふ。」

まずはザイゴートを潰す。幸いザイゴートが行動する前に落とせたから、被害はない。後は、オウガテイル二体だな。

こんな事なら神系で作っておけばよかったな……………。

飛びかかってきたオウガテイルをよけ矢を打ち込む。

「燃えろっ!!」

この力で作った物は俺の自由に出来るから、打ち込んだ矢は消えずに残り、俺の言葉に反応して燃え上がった。体中に火がついたオウガテイルは、悲鳴？を上げながら倒れた。

後は一体。残ったオウガテイルはさっきの攻撃を見たからか、警戒してるみたいだった。

「警戒してるみたいだけどな、この矢の射撃範囲に入れば逃げきれないぞ!!」

分からないだろうけどオウガテイルに対して叫び、矢を放つ。警戒しても射撃範囲に入ってるオウガテイルは、逃げきれぬ訳もなく燃え上がった。

「ふう……、技能作成《スキルメイク》で作った力でも、アラガミを殺せるみたいだな。」

俺の周りには三体のアラガミの死体。他のアラガミにこの場所を荒らされないように、一応死体は完璧に燃やすか。

「焰手品、炎球。」

火を球体にして、死体に当てる。当たった死体は一瞬で燃え上がり、跡形もなく燃える。

そして残ったのは、リンドウの教えてくれた花畑と俺だけになった。花畑は壊さない様に気を使って闘ったしな。

「さて、リンドウとサクヤさんの所に帰るとしますか。」

助けを呼ばれてたら説明面倒だし、早めに帰りたいな。

「たっだいまー。」

「「蒼影!」!」」

居住区に戻ると、リンドウとサクヤさんが駆けてきた。

「蒼影、無事だったの!? 怪我は!」!」

「大丈夫だよ。心配かけてゴメン、サクヤさん、リンドウ。」

「悪い……、助けを呼べなくて。」

「別にいいさ。三人無事だった訳だしな」

「悪い……。」

「だから……。」

パンツ

「痛ってえ。」

リンドウと話していたら、サクヤさんに叩かれた。こっぴどい時のビシッって結構痛いよな。

「無事だったから良かったけど、死ぬかも知れなかったのよ!」!」

「……………」。

「一番年下なのに、一人で……………」

俺を叩いたサクヤさんは泣いていた。原作では、リンドウがいなくなった時くらいしか見た事なかったな……………」

「ゴメン……………」

サクヤさんを泣かせたのは俺なんだし、何も反論出来ねえ。

「無事で…………よかった…………。本当に…………。心配したのよ……………」

サクヤさんは泣きながら俺も抱きしめた。

悪い事したな……………」

「もうしないからさ。泣き止んでくれよ。（ナデナデ）」

前の世界でもやってたように、泣いているサクヤさんの頭を撫でてみる。

年下に泣きながら抱き付いて、頭を撫でられてるって結構異様だな。

「あー、リンドウ助けてくれ。」

「知らねえよ。サクヤだってかなり心配してたんだ。自業自得と思つて受け入れな。」

はあ、心配されるのは嬉しいけど、泣かれるのはキツいな。

「頼むよ。」

「なあ、どうやって逃げてきたんだ？」

「何が？」

「アラガミからだよ。二体もいたんだし、隠れるならまだしも逃げ切るのは難しいだろ。」

「運だよ。偶然大型のアラガミが来てな。お陰でなんとか逃げきれたんだよ。」

これなら誤魔化せるかな？大型のアラガミが来る事なら実際にあるしな。まあ、大型のアラガミが来てで生き残れる事は、ほぼゼロに近いだろうけど、ゼロじゃないし大丈夫だろ。

「よく生き残れたな。まあ、俺達も蒼影のお陰で助かったんだし、もういいか。」

「リンドウ！そういう問題じゃないわよ！」

「サクヤも落ち着け。次からは無いようにさせればいいだろ。」

「えーと、次からは俺も気をつけるからさ、今回は許して欲しいんだけど……」

「絶対にしないで約束して。」

「わかったよ。」

まあ、いざという時はまたやるけど。出来るだけは約束って事で。

口にはしないけどな。

「無事に帰ってきたし、今回だけは許してあげるわ。」

「なら家に帰ろうぜ。」

「そうね。」

「もうこんな事は遠慮したいな。」

アラガミと闘うとはいいいんだけど、サクヤさんってか女の人に泣かれるのはキツイしな。

多分だけどリンドウとサクヤさんは原作通りゴッドイーターになるんだろうな。ツバキさんもそうだしな。

俺もゴッドイーターになって守れるようにならないとな。アラガミには神機が一番だろうし。

## アラガミとの初バトル（後書き）

投稿ですが、二日に一回にします。

二日に一回は二作品でなので、どっちを更新するかは分かりません。  
書き上げれば二作品投稿かもしれないけど。

「考えなしにするから、困るだろ。」

いやな、忙しくて書き上がらないんだよ。

「なんかそればかりじゃないか？」

まあ、そういう事で。

「感想やメッセージ待ってるんで。」

よろしくお願いします。

## 新型神機使い

あのアラガミの事件から五年経ち俺は十三歳になった。ちなみに、リンドウやツバキさんはすでにゴッドイーターになっていた。

ちなみに、サクヤさんは一年前に入隊していて、今はオペレーターをやってるみたいだ。原作では、二年オペレーターでゴッドイーターになったんだよな。

まあ、原作より入隊遅いような気もするんだけど、原作ではあまり書かれてないから、よく分からないんだよな。

そいえば、今居る原作キャラって誰だろうな。

ツバキさん、サクヤさん、リンドウあとリツカがいたよな。他は分かんねえや。

「面倒だな……、場所も分からないしな……。」

「何をしている。適性検査はどうした。」

「あ、ツバキさんっすか。丁度いい所に。」

「なんだ？」

「場所分らないから、教えてくれませんか？」

「……………まったく。」



なんか呆れられてるな。まあ当たり前か。

「なんかすいません。」

「こつちだ、早くついてこい。」

「ありがとうございます。」

「しかし、お前がゴッドイーター、しかも新型の候補になるとはな。」

「まあ、俺も守りたい人がいますからね。リンドウやサクヤさん、ツバキさんもですね。」

バシッ

「思い上がるな、私はお前に守られるほど弱くない。もちろんリンドウもな。」

「痛い……。てか弱い、弱くない関係ないでしょ。戦場なら、お互いに守り守られじゃないんすか？それにツバキさんは女性だし……。」

「まったく……。／＼／」

ん？なんか照れてるみたいだな。偏見だけどゴッドイーターは女性扱いされなさそうだし、女性扱いに慣れてないとかか？

いや、流石にないな。

「まあ、いいや。そいえばさくはオペレーターとして働いてるんですよね?」

「ああ、後で挨拶しておくといい。いつも心配していたからな。」

そいえば、サクヤさんは休暇貰った時は会いに来てくれてたな。

「わかってますよ。ちなみに、ツバキさんはどうなんですか?」

「何がだ?」

「心配してくれてたんですか?」

「当たり前だ、お前はまだ子どもだからな。まあ、それ以外もあるが。」

そいえば俺十三歳だったな。てかそれ以外ってなんだ?

「ツバキさん、それ以外って?」

「聞こえていたのか。ノノお前にはまだ分かんたろうよ。」

……………もしかしてフラグ建ててた?夕紀の言う事には、フラグ体質なんて付けてたみたいだし…………。

いや、まさかなあ。

「で、まだですか?」

「ここだ。」

おお、いつの間にか着いてたみたいだな。

「ありがとうございますつと。んじゃ。」

中に入ると上から声が聞こえてきた。

「ようこそ……。人類最後の砦フェンリルへ……。今から対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』としての適性試験を始める。」

演説で多くの人々を魅了するようか美声が円形の広い部屋に響き渡る。

この声はヨハネス・フォン・シックザール、ソーマの親だったよな。

この部屋の壁にはあちこちに傷や弾痕などがついている。神機でつけた傷なんだろうな。そして、この部屋の中央には台座が置かれていた。

普通ではなかなか目にしない光景に少し気圧されていると、ヨハネス……支部長から再び声をかける。

そいえばこの時期ヨハネスって支部長だったんだな。

「少しリラックスしたまえ。その方がいい結果が出やすい……。心の準備ができれば中央のケースの前に立ってくれ」

「了解」

そう答えて、部屋の中央へゆっくりと向かっていく。置かれている

ケースは上下半分に分かれており、それぞれに半円型の赤い物体がはめられていた。その物体がある場所は、あいだに置かれた剣の柄の部分……。

神機と腕輪だよな……。なんだかものすごく嫌な予感がするんだが……。恐れてても始まらないし、柄に手を伸ばす。

「ふう……………」

すると案の定、上の蓋がギロチンのように落ちてきて腕を挟んだ。

「ぐっ……………。ぐううつつ！！」

グチャグチャと嫌な音をたて、手首に堪えがたい激痛が走る。

ヤバいな、前の世界での闘いと同じかそれ以上だ。しかも久しぶりの痛みで、油断もしてたから声が出てしまう。

ケースの上蓋が開くと赤い腕輪をつけた自分の腕と、その手に柄をしっかりと握られた剣が出てきた。

やっぱり初めの装備は見た目も簡単だよな。と、そんな事を考えていると、柄のすぐ上にある黄色い物体から黒い触手が伸びてきて腕輪に刺さった。

気持ち悪いな。

「おめでとう。君がこの支部初の新型ゴッドイーターだ」

ヨハネスの声が響く。どうやら終わったみたいだな。面倒だったな。

「次に、適性試験後のメディカルチェックが予定されている。後ろの扉から出て、指定された場所まで行つて待機していてくれ。尚、『気分が悪い』など症状がでた場合は即座に申し上げるように。」

期待してるよ、波柳 蒼影君。」

「ういっす。」

原作通りなら、リンドウと同じように利用するつもりなんだろうけど、簡単にはいかさないぜ……。もちろんリンドウも殺させねえ。まあ、正確にはアラガミ化させないだな。

さてと、どうすっかな。サクヤさんの所にも挨拶しに行くか。メディカルチェックもいつ行くかわからんし、ついでに聞けばいいや。さてとエントランスにいけばいいんだよな？原作ではエントランスだったし。

「あれ？見ない顔だね。新人君？」

後ろから声をかけられたから、後ろを見ると、白いタンクトップにゴーグルをした女の子がいた。

原作より幼いけどリツカだよな……。

「はい、今日から配属になりました。」

「ふーん。あ、もしかして新型の？」

「はい、一応新型神機使いです。」

「そっか、私は楠　リツカだよ。なにか分からない事あったら聞いてね。後、敬語は使わなくてもいいよ。」

「わかった。よろしくな、リツカ。」

「ふふっ、適応早いね。えっと……。」

「そいえば新型としか言ってなくて、名前は教えてなかったけな。」

「俺の名前言ってなかったな。俺は、波柳　蒼影だ。」

「改めてよろしくね、蒼影。そいえば、どこか行こうとしてなかった？」

「エントランスに行こうと思ったんだけど。」

「なら、私も行くつもりだったから、一緒に行こうか。」

「助かったよ、ありがとう。」

原作キャラとも知り合いになれたし、今日は運が良かったな。リツカは原作でも好きだったしな。

「でも、凄いやね。」

「何がだ？」

「だって、私より小さいのにゴッドイーターなんだから。」

「リツカだつてここで働いてるんだろ？」

「私は整備班にいるけど、正式なメンバーじゃないからさ。それに、ゴッドイーターみたいに命の危険は少ないし。」

「でもさ、整備士がいないと神機の本格的な手入れは出来ないし。それに、正式じゃなくても神機の整備を出来るのは凄い事だと思うけど。」

実際に神機の整備がきちんとしてないと、いざという時に使えないかもしれないしな。神機はアラガミと闘う唯一の武器だしな。

「ふふつ、ありがとう、蒼影。」

「別に礼を言われる事はしてなくてね？」

「着いたよ。またね、蒼影。」

「あ、ああ。」

リツカは俺に声をかけ、走っていった。結局なんで礼を言われたんだろう……。

まあ、いいや。サクヤさんを探して挨拶とメディカルチェックとかの事聞かないとな。

ついでにリンドウにも挨拶しないと。これからは先輩って事になるんだしな。まあ、リンドウとは友人みたいな感じだし、敬うつもりは全くないんだけどな。

## 新型神機使い（後書き）

ネタが無い！。

「いきなりなんだよ。」

後書きのネタがないんだよ！

「知るか、ボケ。」

ひどい……。

「てか、なんでもいんじゃないのか？」

なんかネタ無いと書けないだろ。

「そこは、ホラ、文才で……、いや、無いか。」

黙れ。ん……、アンケートでもするか？

「どうせ俺の能力かネタだろ？」

あと人気投票？まあ、お気に入り少ないし、感想や投票そんなにあると思わないけど。

「いや、感想はあるだろ。お気に入りには確かに少ないかも知れないけど、増やす方法なんて無いだろ？」

わからん。まあ、無期限で技能作成《スキルメイク》と話のネタや



リク募集するか？

「リク書けるのか？」

さあ？ただ参考には出来るし。

「はあ……。読者の皆さん、よかったら感想、リク、ネタお願いします。」

よろしくお願いします。

支部長、榊博士との会話（前書き）

アンケートあります。

## 支部長、榊博士との会話

「久しぶり、サクヤさん。仕事どうつすか？」

「蒼影、どうしてここにいるの？」

「そいえばサクヤさんやリンドウには新型の適合者になった事言っ  
てなかったけな。二人共フェンリルで働いてるし、あまり会う機会無  
かったからな。会ってもわざわざ神機とかについて話したりしない  
しな。」

「えっと、実は新型の神機使いになったから。だから、サクヤさん  
とリンドウに挨拶するついでに聞きたい事があつて。」

「新型！？じゃあ、今日配属されるっていう新人って、蒼影の事な  
の？」

「そついう事になる。」

「聞いてないわよ……。そついう事はきちんと伝えてよね。」

「あー、機会が無かつたしな。」

「リンドウには伝えたの？後、聞きたい事ってなにかしら？」

「リンドウにも伝えてないよ。てか、サクヤさんの方が会いに来て  
るわけだし、サクヤさんしらないのにリンドウが知るわけ無いから。  
聞きたい事ってのは、メディカルチェックやらの事だよ。」

「まったく、まあいいわ。えっと、今後の予定はメディカルチェックを受けた後、基礎体力の強化、戦術理論の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムみたいね。」

「……面倒だな。」

てか俺から聞いたけど、サクヤさんが知ってるんだ。こういうの原作のツバキさんみたいな教官系の人が知ってるもんだと思った。

「そう言わないの。榊博士の研究室に一五　までに行くようにね。それまでこの支部を見回ってたら？今日からお世話になるんだし、挨拶の一つでもしておいたらいいわよ。」

「了解。」

てか榊博士ももういるんだ。まあ、ヨハネスがいるわけだし、いてもおかしくないか。

「確か榊博士の研究所はラボラトリにあったよな。」

エレベーターに乗って榊博士の研究所を目指す。その間他のゴッドイーターの視線が珍しそうに見てくるから、ウザくてウザくて。

この支部初の新型だからか、俺の年のせいか分からないけど、こんなに見なくてもよくないか？

コンコン

「波柳蒼影です。」

ノックがいるのかは知らないけど、一応ノックをしておく。

「入っていいよ。」

許可を貰ったし、中に入るか。

中に入ると、機械やコードがそこら中にあり、その中で忙しそうにキーボードを叩いている狐目の男と、白いロングコートを着た男がいた。

ペイラー榊とヨハネス・フォン・シックザールがだよな……。

「ふむ……、予想より862秒はやい……、よく来たね、波柳 蒼影君。私はペイラー榊。アラガミ技術開発の統括責任者だ。」

自己紹介の時くらい指止めるよな……。まあ、別にこんなキャラなのは分かってるけど、知らなかったらかなりムカついてたな。

「さてと……、見ての分かんと思うけど、まだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

榊博士はそう言って支部長を見る。

「榊博士……、そろそろ、公私のけじめを覚えていただきたい。先程の適合テストではご苦労だった……、私の名はヨハネス・フォン・シックザール。この地域一帯のフェンリル支部を統括している。さて、我々フェンリルの目標を改めて説明しよう。君に課せられた責務は、この地域周辺のアラガミの撃退とその素材を持ち帰ることだ。そしてそれらは全てここ……、前線基地の維持と、来るべきエイジス計画の資源として使われる。」

「この数値はっ……!!」

突然榊博士の声が横から割ってきて説明が中断される。少し驚いて榊博士の方を見る。

何か怖いな。まあいい、今は話を聞かないと。

「エイジス計画……、って確か外部居住区のメディアでもよく取り上げられているあの計画だよな。」

ヤベ、ついタメ口出てしまった。まあ支部長は表面上気にしてないし、別に大丈夫か。

「そう……、人類の楽園を作るという理念のもとに進められている計画だ。」

正確には、旧日本海付近に外部居住区のものとは比べものにならないほど強固な、対アラガミ装甲を展開した人工の島を作り、そこに人々を住まわせるというものだ。」

「ほほ……!!」

また榊博士の声が割って入るが、支部長は無視する。

よくあの声は無視できるよな。結構でかい声なんだけどな。

「この計画が成就すれば……、少なくとも人類は当面の間、絶滅の危機を遠ざけることが出来るはずだ。」

「すごいっ！！！！これが新型かぁー！！！」

「ペイラー……、説明の邪魔だ。」

ついに堪えられなくなったのか支部長がが榊博士に注意する。

よくここまで耐えたと誉めてやりたい。何様かって話だけだな。

「ああ、ゴメンゴメン！ちょっと予想以上の数値に舞い上がっちゃったんだよー。」

榊博士の様子にため息を漏らしている支部長。

………やっぱり、支部長って苦労してるんだな。アーク計画の一部には、榊博士に対してのストレスあるんじゃないの？

榊の様子にため息を漏らすシックザール。

「ともあれ、人類のためだ。尽力してくれ。では、私はこれで失礼する。ペイラーは検査が終わったら、私にデータを送っておいてくれ。」

支部長はそう言って、部屋を出て行った。

「よし！準備は完了だ。そのベッドに横になってくれ。少し眠くなるけど心配はいらない。」

次に目が覚めたときは自分の部屋だ。戦士のつかの間の休息というやつだね。予定では10800秒だ。ゆっくりおやすみ」

何されるんだろうと……。少し……。いやかなり不安なんだけどしょ

うがない。横になると、検査が始まった。

榊 side

眠った蒼影君を部屋へ送った後、自分専用のターミナルにアクセスし、ハイドの計測データを見る。

ふむ……、ただでさえ適合しにくい新型神機に選ばれ、なおかつソーマ以上の適合率の高さ……、間違いないなく即戦力となる逸材だね……。

現在世界に新型神機使いは数えるほどしかない。その中でも蒼影君の潜在能力の高さは群を抜けるね。

「指導方法や成長次第では世界最強のゴッドイーターになるかもしれないな……。」

比較的に不味いコーヒーを飲みながら呟く。

これから蒼影君はいろいろな思惑に巻き込まれるんだろうね。

蒼影 side

目が覚めたら、部屋のベットにいた。ここは俺の部屋になるのか？



結構綺麗な部屋だし、外部居住区とはかなり違うな。やっぱりフェンリルは凄いな。

「そいえば、検査あったはずだよな。特に傷とかないし、どんな検査だったんだろう？」

まあ、いい。まずは服を着替えるとするか。

俺の服は原作で言うスリーパーノワールだ。黒色は結構気に入ってるからな。本来はフェンリルから支給されてるの着るんだろうけど、こっちの方が気に入ってるしな。

他のゴッドイーターもそれぞれ違う服着てるし、大丈夫だろ。

なんか着にくいな。……………。

「ああああ！！腕輪邪魔だつての！！」

俺の右腕に付いている無骨な腕輪が、服に引っかかって着にくい！！

「通れっ！！」

はあ、なんとか通ったな。訓練用のミッションでも受けるか……。そいえば、訓練用のミッションって誰が担当するんだろうな。

「サクヤさん、訓練用のミッションを受注したいんだけど。」

「分かったわ。ツバキさんが用意したミッションが届いてるわ。準備が出来たら出撃ゲートから案内表示の指示に従って第一訓練場へ

移動して。」

「了解。」

「ミSSIONの受注や報酬の受け渡しなどは私が行うから、これから関わる事は多いと思うわ。よろしくね。」

「ああ、てか関わるのはそんなん関係ないけどね。幼なじみだしさ。」

「そうだったわね。訓練頑張つて。」

今、サクヤさんなんて言った？

ツバキさんが用意した……………？もしかしてツバキさんが担当なのか？  
うわぁ……………。嫌だな、原作でも鬼教官なんて言われてたし厳しいだろうな。

まあ、頑張るか……………。

## 支部長、榊博士との会話（後書き）

「最近こっちしか更新してないか？というか、俺の出番は？」

リンドウは原作で出るしいいじゃん。という事でG O D   E A T E  
Rからリンドウに来てもらいました。

「つたく、で？なにかあるんだろ？」

ああ、原作前にロシア編やるつもりなんだけど、ダニエラと大車ど  
うしようかと。

まあ、ここでアリサの洗脳といて、オレーシャを殺させないように  
するんだよ。で、オレーシャとリディアは極東支部にアリサと行く  
んだけど、ダニエラをハーレムに入れるかってのが一つ。

「だけだよ、今も捌けてないじゃねえか。」

まあ、そうなんだけども。で、二つ目が大車にはロシアで退場願  
うかと。

「なんでだ？」

だって、アリサの洗脳といたって、大車いたらまた薬で洗脳される  
じゃん。後、ウザイ。

だから、ダニエラと大車をどうするかアンケート取ろうかと。

「なるほどな。俺からも協力頼むわ。」

期限はロシア編始まるまでかな？

よろしく願いします。後、技能作成の方も何かあったらお願いします。

「んじゃ、俺はデートだから。」

頑張れよ。

## 訓練

えっと、こっちなな。原作では見えなかった所も見えるし、面白いな。

スツという音と共に扉が開く。中は適合テストを行った場所と似ていた。その中央には、ツバキさんがいた。

「ツバキさんが担当なんですね。仕事大丈夫なんですか？」

「お前が気にする事ではない。それに、私はそろそろ引退するからな。」

ツバキさんって、この時期に引退するんだな。

「引退っすか……、一緒にミッション行くのは無理なんですね。」

「そういう事になるな。まあいいだろう。早速トレーニングを開始するが、その前にまず簡単な説明をしよう。お前やその他の者達、現役を引退したゴッドイーターまで、皆腕輪からオラクル細胞を投与している。オラクル細胞についての詳しい説明は、近いうちに榊博士が講義を行うのだから、そこで学ぶように。そしてそのオラクル細胞は、人体への投与に成功すれば、身体能力を爆発的に引き上げてくれる。筋肉の瞬発力や持続力、反射神経や動態視力、聴力など身体中のほぼ全ての器官が強化される。よってそれに比例したトレーニングメニューとなるのでそのつもりでな。」

「マジかよ……。」

比例したトレーニングって、絶対に量多いよな。しかも小さい時から俺を知ってるし、身体能力が高いの計算してトレーニングさせろうだな。

「一応言っておくが、お前は他のゴッドイーターよりも厳しいからな。」

「マジすか？」

「当たり前だ。どうせお前も分かっていたのだろう。」

「まあ……。」

「なら、まずは腕立て、腹筋、背筋を2500だ。」

「……………桁おかしくないか？しかもまずはってなんだよ。」

「それが終われば、神機を使つての訓練や反射神経を鍛えるから、覚悟しておけ。」

「仕事は……………」

「さつきも言っただろう。それに、私達を守るんだろう？なら、これくらいこなして見せろ。」

初めの方はツバキさんにしては珍しくニヤニヤしながら言っていたが、最後の方は真剣になっていた。

「わかりましたよ。」

守るって言ったし、こんな事で弱音を吐くわけにはいかないよな。

「ハアハア、もうヤバイ……。」

転生する時少し体力落ちるし、最近ほとんど鍛えてなかったからな……。他にも2500なんて連続でやってない、ってのもあるんだろうけどな。

「よし、次に行くぞ。」

「少し休憩を。」

「駄目だ、お前は一人で近距離、遠距離とこなす事が出来る新型の神機使いに選ばれたんだ。新型は戦闘中に神機の変形を行いながら戦う。だが、この支部には新型がない。そのため、神機を使いこなすためには自らでなんとかしなければならない。」

「まあ、新型は今ほとんどいないし、旧型とは戦い方も違いますね。」

実際、新型がいればチームの状況に合わせる事も出来るし、一人で戦う時も旧型よりは戦いやすいな。

「さらに、剣、銃、装甲、それぞれ三種類で計九種類の兵装を扱うため、他の神機使いより新型の神機使いにかかる負担は大きい。

そのため、お前は他の神機使いより覚える事やしなければならぬ事が山ほどあるんだ。」

「確かにせっかくの新型なのに、いつまでも戦場に出ないんじゃない意味ないですね。」

それにいつまでも戦場に出ないなんて、俺は嫌だしな。

「分かっているだろうが、この極東支部の連中は、新型神機使いを見たことがない……。その分お前にかかる期待も大きくなるはずだ。」

「わかってます。俺が努力をして他の人の負担が軽くなるなら、俺に負担がかかるのはいいし、覚悟もしてますよ。」

昔、アラガミに襲われた時に覚悟はしたしな。それに他の世界でも似たような事はあったからな。

「なら、早速続きをするぞ。まずは、近距離攻撃、兵装の切り替え、遠距離攻撃だ。」

「了解。」

さてと、とつとと訓練を終わらして、神機を使いこなせるようにしますか。



「今日はここまでだ。明日からは、実戦も入るから覚悟しておけよ。」

「了……………解……………」

「はあ……………。今日はもう休め。本来なら一週間ほどに分けるのを一日でやったのだからな。」

「はあ！？何でそんな事を……………」

「お前が思ったよりもついてきたからな。ついやりすぎてしまった。」

「……………」

鬼……………。この時から鬼教官だったんだ……………。訓練だったのに、普通に神機使って撃ってきたからな！おかしいだろ！人間相手に神機使うか！？

反射神経鍛えるとか一歩間違ったら死んでたぞ！？

「ああ、明日はリンドウと共にミッションに行ってもらっからな。」

「わかりました……。じゃあ上がりますね……。」

「ああ、そうだ。今まで見てきた神機使いの中ではいい動きをしていたぞ。」

「ありがとうございます。」

ツバキさんが誉めるのって珍しいな……。

てか、入隊してすぐに実戦ってどうなんだろうな。やっぱり新型って事もあって、早めに実戦に出したいんだろうな。

他にもツバキさんが一日で特訓終わらしたってのもあるんだろうけどな。

「あれ？蒼影、疲れてるみたいだね。」

「蒼影どうかしたの？」

「リツカにサクヤさん……。訓練が……。」

「ツバキさんの訓練ね。でも、一週間くらいでやるんじゃないの？」

「多分だけど、一日目はそんなにやらないんじゃないかな？他のゴッドイーターもそうだよな、サクヤさん。」

「そうよ、そんなに疲れとは思わないけど。」

あ、やっぱり他はもつと楽なんだ。

「ツバキさんが一日でやらせたんだよ。明日から実戦だつて。」

「そいえば、蒼影は昔からツバキさんに気に入られてたからね。」

「大変だったんだね。あ、訓練終わったんなら、何か神機であった？」

「特にはなかったよ。実際に使ってたにかあったら、リツカに言うよ。」

「うん、神機なら私に任せてよ。」

「蒼影、今日はもう休んだら？」

「そうするよ。じゃあ、また。リツカ、サクヤさん。」

とつとと部屋に戻って寝て体を休ませるか。明日からは実戦だし、疲れで動けなかったらシャレにならないしな。

「見ない顔だな、ジーナ知ってるか？」

「知らないわ。」

「確か今日から配属になった新型ではないか？」

あれは……ジーナとタツミ、ブレンダンか？

「今日から配属になりました波柳 蒼影です。」

「あなたが、今日配属された新型だったのね。」

「なるほどな！俺は大森 タツミだ。まあ、最初のうちは無理せずに仲間を頼っていいからな！」

「俺はブレンダンだ。ブレンダン・バーデル。よろしく。」

「ジーナ・ディキンソンよ。お互い頑張りましょう？」

この三人ってこの時期からいたのか？正直いついたとか原作にないからな……。

「よろしくお願いします。」

「ああ、別に敬語なんて使わなくていいぞ。」

「わかった。」

「蒼影はいつから任務に出るんだ？」

どうなんだろう？明日は実戦だけど、訓練なんだよな……。でも一応任務って事になるのか？

「一応実戦は明日かららしい。」

「明日からか。大丈夫か？」

「はい、覚悟はしてますから。」

「なら、俺から言う事はない。なにかあったらいつでも力になる。」

ではな。」

ブレンダンはそう言って去っていった。やっぱりブレンダンって冷静だよな。

「待てよ、ブレンダン！またな、蒼影！」

タツミもかよ。てか三人共任務から帰ってきたばかりだったのか？

「まったく男どもは……。蒼影だったわよね、帰るところを止めて悪かったわ。」

「いえ、これからよろしくお願いします、ジーナさん。」

「私も敬語はいらないわ。」

「わかった。じゃあ、もし一緒に出る事があつたらよろしく。」

「ええ、よろしくね。」

ジーナと会話を交わして戻る。やっと休めるな。

## 訓練（後書き）

なあ。

「なんだ？」

どうしたら、面白くなるかな？

「知るか！」

いやさ、D・C・？もだけど、お気に入り百が限界だと思うんだよな。後、感想。

「いや、才能じゃないか？」

だよなあ。まあ、趣味だし別にいいけど、やっぱりいろいろ感想欲しかったり、せっかくならいろんな人に読んで欲しいよな。

「まあ、わからなくてもいいけどさ。」

まあ、いいや。今は見てくれてる人の為、自分の為に頑張るか。

「そうしろ。」

じゃ、次回も読んでください。

## ゴッドイーターとしての初実戦

「ん……、朝か？」

時間は……、まだ大丈夫だな。まあ、目が覚めたしエントランスに行くか。

「……………なんか人少ないな。」

朝だからか？ いや、朝だからってこんなに少ない筈ないよな。

「蒼影じゃない。こんな朝早くからどうしたの？」

エントランスに着くと、オペレーターの仕事をしているサクヤさんを見つけた。やっぱりオペレーターって忙しいのか？

「目が覚めたから、誰かいないかと思ってきたんだよ。一人でいても暇なだけだしな。」

「そう、私でよかったら相手になるわよ。今は人も少ないから。」

「サンキュ。」

あ、そいえばこの世界でも時計作ってるし、サクヤさんに渡しとこうかな？ 一応金属は前の世界でかなり買い溜めしてたから、この世界でも作れたんだよな。一応は原作キャラ＋予備をいくつか作ってる。

「ねえ、蒼影。今日リンドウと行くのよね？」

「そうだけど？」

「昨日リンドウには言ったの？」

「いや、面倒だし。あ、そうだ。これサクヤさんに。」

「これ……時計？でも、どうして。」

「趣味かな。前から考えてて、仲良い人には渡すつもりだったんだよ。ちなみに男女でデザインは違うから。後、裏に名前彫ってるから。」

「ありがとう、でもよく素材入ったわね。」

「まあね。」

「大事に使っわね。」

サクヤさんの笑顔が綺麗だ。やっぱり好きな人からのプレゼントは嬉しい物なのかな？

ん？気付いてるのかつて？

当たり前だろ。二つの世界を生きて複数の人から好意を持たれてたし、付き合った後とかは嫌われなくなかったし、人の気持ちは大分分かるようになるしな。

ちなみに、この世界は一夫多妻はアリらしい。といっても、許可されるのは養えるだけの力がある人だけだが。



だから、ゴッドイーターやフェンリルで働いてる人間くらいしかないんだけど。ゴッドイーターで複数の人と付き合った人は少ない。理由はいつ死ぬかも分からないから、悲しませないためってのが多いみたいだな。

まったく無い訳ではないらしいけど。今でも他の支部に居るっての聞いた事がある。

「おはよう、サクヤさん、蒼影。」

「あ、ジーナ。今日はどうしたの？」

「リンドウさんに言われて新型のミッションについて行く事になったわ。」

ジーナか……、流石にまだ渡せないな。昨日知り合ったのに渡したらおかしいからな。今渡せるのは、リンドウ、サクヤさん、ツバキさんくらいか。

「なんかスマン。」

「肝心のリンドウはまだ来てないのね。」

「さっき会ったからもうすぐ来ると思うわ。」

相変わらずだな、リンドウは。てか、いつからなんだ？

「なあ、ジーナ。俺っていつミッションに行くんだ？」

「リンドウさんが来たら、すぐに行くわ。」

「うーす、待たせたな。んで、新型は……、あ？蒼影じゃねえか。何でこんな所にいんだよ。」

「ふふつ、リンドウの言う新型が蒼影よ。」

「は？マジで蒼影が？」

驚いてるな。サクヤさんやジーナなんか少し笑ってるよ。

やっぱり内緒にしててよかったな。リンドウのこんな表情を見るとは思わなかったよ。

「まさか、蒼影がねえ……。まあ、いいか。なら、早速行くぞ。サクヤ、ミッション頼むな。」

「分かってるわ。頑張つてね、蒼影、ジーナ。」

神機保管庫エリアに移動し、俺の神機が納められたケースを持って、ヘリに飛び乗る。俺は一応新人だし、オウガテイルが相手だろうな。

さほど時間はかからずに俺達の乗ったヘリは任務の場所である「贖罪の街」へと到着した。

昔は人が生活していた大都市だったんだろうけど、アラガミの出現直後に崩壊し、無惨に食い破られたビル郡が今も残っているな。

「ここも随分荒れちまったな……。んじゃ、蒼影。実施演習を始めるぞ。…命令は三つ。」

命令という単語を聞いて、小さい時から一緒に過ごしていたからなんかに笑えるな。

「死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そんで隠れる。運が良ければ不意をついてぶつ殺せ。……あ、これじゃ四つか……。」

リンドウの数え間違い……。いやわざとかな？まあ、思わず吹き出してしまった。こちらを見てリンドウは微笑む。

「そうそう、肩の力を抜いてな。とにかく生き延びることだけを考えろ。生きてさえいりゃ、あとは万事どうにでもなる」

「分かってるさ。一応言っておくけど、リンドウも必ず生き残れよ。後、何かあっても一人で残って罔とかなるなよ。」

原作のセリフだし好きだけど、なんか悔しかったし少し空気を壊してやった。

「はは、分かってるぞ。」

「んじゃ、どうする？俺が出て危なくなったらフォローっすか？」

「私はそれでいいわ。」

「なら、それで行くぞ。蒼影頑張れ。」

いたな……。今回の討伐対象のアラガミ、オウガテイルが二体目の前の広場を歩いている。いきなり二体かよ……。

オウガテイルからは建物の影になっていて、こっちには気付いてないみたいだな。

「ならっ！」

物影から飛び出し、手前にいるオウガテイルを数回斬りつける。怯み倒れたオウガテイルを無視し、もう一体を斬りつける。

そして、一度離れ銃に切り替え神属性の弾丸を撃ち込む。OPが無くなると、再び近づき斬り込む。そして一体倒し、二体目を倒そうとする。

っ！？

後ろから放たれたレーザーを横に転がり避ける。

「まったく、何だよ！？」

レーザーが撃たれた場所を見ると、小型のアラガミ、ザイゴートがいた。

おいおい、オウガテイルだけじゃないわけ？いきなりイレギュラー

かな。まあ、いい。とつと倒すか！

まずはザイゴートに向かって走り、毒ガスやタツクルをされる前に空中で斬りつけ、ザイゴートを地面に落とす。

そして、神機に集中すると、神機から黒い口のような物が出てくる。神機の補喰形態《プレターフォーム》だ。そして落ちたザイゴートを補喰し、バースト状態になる。

補喰で手に入れたアラガミバレットを使い、オウガテイルを倒す。そして、再び浮かび上がるうとしたザイゴートを斬りつけ倒す。

「ふう……。」

「凄いわね、新人と思えないわ。」

「ありがと、ジーナ。俺は役に立ちそうか？」

「ええ。」

「俺達の出番は無かったみたいだな。ザイゴートが来た時は心配したが、無用だったみたいだな。」

「まあ、ツバキさんの訓練が厳しかったから。」

「姉上か……。災難だったな。まあ、次から一人でも大丈夫なんじゃないか？」

「俺がわかるかよ。」

「んじゃ、帰って報告するか。」

「了解。報告は任せたりンドウ。」

「何でだよ。まあ、イレギュラーにもきちんと対応したし、これくらいはいいか。」

「サンキュー。ジーナも行こうぜ。」

「ええ。」

帰りのへりに乗り込み、アナグラへと戻る。まだ三日も経ってないのになんて疲れたな。

「疲れた……。」「

「初めての实战はどうだった？」「

「いきなりイレギュラーがあって疲れたよ。」

「何があったの？」「

「蒼影が戦ってる時に、ザイゴートが来たんだよ。」

「そうなの、大丈夫だったのよね？」

「ああ。俺達が何かをする前に一人で片付けてたしな。」

「流石、蒼影ね。新人はオウガテイルにも苦戦する事があるのに。」

やっぱり新人はオウガテイルにも苦戦するんだな。まあ、初めての  
実戦で訓練と同じように行動出来る訳ないか。

「期待の新人だな。これから頼むぞ、蒼影。」

「分かってるよ。」

「蒼影、今日は特にする事無いはずだから、休んでたら？多分明日  
からは、普通にミッションに行くと思うわよ。今日の事で、実力は  
問題ないと思なされると思うわ。」

「なら、休むとするよ。」

あー、リツカの所に行って神機の調整してもらわないとな。……  
明日でいいか。

## ゴッドイーターとしての初実戦（後書き）

「なあ。」

ん？どうした？

「戦い短くないか？」

まあ、戦闘描写苦手だし。少しずつ長くしたいと思っけどね。

「上手くなるのか？」

知らね。まあ、なんとかなるさ。

「まあ、頑張れ。」

ああ。んじゃ、今回はこの辺で。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1174z/>

---

転生して異世界廻り～GOD EATER 編～

2011年12月16日17時48分発行